

「clas」を知る

茂登山清文(もとやま・きよふみ | 名古屋大学情報科学研究科 准教授・教養教育院共用施設ワーキンググループ委員)

1. 「視覚」「複眼的思考」「総合的知識」「地域」「文化」

教養教育院プロジェクトギャラリー利用要領の第2条(目的)にはこう書かれています。

「clasは、名古屋大学の授業及び教職員・学生・卒業生の教育・研究・社会活動にかかる展示・プレゼンテーション・ミーティング等に使用される空間として、大学における視覚を通じた複眼的な思考と総合的な知識の育成、地域を視野に入れた文化の向上に資することを目的とする。」

「clas」は、名古屋大学の構成員や関係者に開かれた施設です。そして大学教育において、「視覚」が確かな役割を果たすとの理解に基づいています。「複眼的」「総合的」とは、教養教育の基本とも重なります。他方で、地域に開かれながら、その文化を担う施設となることも、大学の存在意義に関わる重要な認識でしょう。

2. 多岐にわたる視覚プログラム

2007年の開設からこれまで、展覧会を中心に75のプログラムがおこなわれてきました。それらは「視覚を通じた」という点においては共通性がありますが、とても多岐にわたっています。簡単には分類できないのですが、次のような属性を見出すことができます。この他にも、新入生らへの歓迎の意をこめて、プロジェクトがおこなわれることもあります。

- ・現代芸術の先端を表現する国内外のアーティストの紹介
- ・建築や照明器具、環境デザインやグラフィックなどデザイン
- ・実験器具や科学写真などの授業資料
- ・研究成果のプレゼンや、開発されたプログラムの実証実験
- ・基礎セミナーをはじめとする授業やそれらの成果の発表
- ・サークルやOBOG、附属高校生らの活動の発表
- ・留学生の作品発表や文化交流、他大学との連携

3. ハンドアウトとギャラリートーク

プログラムに関連して「clas」では、二つのことをおこなってきました。ひとつはハンドアウトの配布で、もうひとつはギャラリートークです。

ハンドアウトは、通称「理解の手引き」と呼ばれています。作品を解説するのではなく、作品を前にした鑑賞者が自分の目で見えて頭で考えていくための、ちょっとした「手引き」です。知識を与えるのではなく、思考を刺激することを意図してつくられています。

ギャラリートークは、作品を展示している制作者と直接ふれあう機会です。トークを聴いて、鑑賞者は作品の制作意図を知ることができますが、同時に名古屋大学ではあまり出会う機会がなかった他者を発見するはずで

4. 記録とテキスト「アニュアル」

「clas」でおこなわれたプログラムの記録は、一年ごとに「名古屋大学教養教育院プロジェクトギャラリー「clas」アニュアル」として編集、発行されます。A5版、100ページ余りの小冊子で、写真と基本的な情報が掲載されます。

「アニュアル」には、プログラムに関連するテキストも多く載せられます。それらは専門家に向けられたものではなく、教養教育を視野にいれつつ書き下ろされたものです。テキストを通して、名古屋大学の、もうひとつの「知」の一端にもふれることができます。

